

ベートーヴェンの歌曲研究

—連作歌曲集《遙かなる恋人に寄す》の演奏解釈をめぐって—

吉 村 哲

はじめに

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770~1827) は、交響曲、ピアノソナタ、室内楽曲、協奏曲、オペラ、教会音楽など様々な分野で、他の作曲家が試みなかったような技法を取り入れた名作を残した。ベートーヴェンの歌曲は、上記のジャンルと比較すると演奏会で取り上げられる機会は決して多くないように思われる。しかしどの曲も優れた作品であるばかりではなく、ベートーヴェンの個性が際立っている。

中でも《An die ferne Geliebte 遙かなる恋人に寄す》Op.98 は、形式的独創性、音楽的表現方法において最も優れた作品であると言えよう。この曲は、ベートーヴェンの歌曲のうちでは後期の作品に分類され、ベートーヴェンの歌曲のエッセンスが集約されているように感じるのである。本論文は、《An die ferne Geliebte 遙かなる恋人に寄す》Op.98 の魅力のもととなる音楽的特徴を明らかにし、演奏者の視点からの演奏解釈を考察することを目的とする。

1. 《An die ferne Geliebte》の成立

ベートーヴェンは、生涯のうちにピアノ伴奏版の歌曲を約 90 曲残している。《An die ferne Geliebte》は、1816 年 4 月、ベートーヴェンが 45 歳の時に作曲した連作歌曲集である。同年 4 月 25 日に初演、1816 年 10 月にウィーンのシュタイナー社から出版され、ベートーヴェンのパトロンであったロプコヴィッツ伯爵に献呈されている。

全 6 曲からなるこの作品は、アロイス・ヤイテレス Alois Jeitteles (1794~1858) の詩に対する付曲である。ヤイテレスは、ボヘミア出身の当時 21 歳の若い医学生であったが、ウィーンの劇場関係者や音楽関係者と親しくしていた。いくつかの詩集を残しているが出版されておらず、どのような経緯でベートーヴェンが入手したのかは明らかにはされていない。詩に登場する恋人は、1812 年の「不滅の恋人」のことだと見なす向きもあり、ベートーヴェンがヤイテレスに詩作を依頼したという説もある。

2. 《An die ferne Geliebte》の音楽的特徴

この作品は、音楽史上初の連作歌曲集として知られているが、後世の、例えばフランツ・シューベルト Franz Schubert (1797~1828) による連作歌曲集《Die schöne Müllerin 美しい水車小屋の娘》(全 24 曲) のように各曲が独立しているものと様相が異なる。6 編から成る詩は、どれも離れた恋人に寄せる想いが綴られているが、大きな時間的変化や物語性は無い。遠い地にいる恋人に対しての憧れ、希望、不安に揺れる青年の心情がひたすら歌われるのである。全 6 曲は、ピアノの間奏によって曲同士が結ばれ、途切れる事無く演奏される。そのため、初めて耳にする人は「6 曲からなる連作歌曲集」ではなく、「ロンド形式の 1 曲の作品」であるような印象を受けるかもしれない。

また、民謡調の歌曲であると評されることも少なくない。それぞれの曲の旋律がシンプルであることと、有節歌曲ないし変化有節歌曲の形式が用いられていることがその所以かもしれない。しかし全体を見ると、素朴な旋律でありながら、ピアノの澄んだ和声の響きと調和することにより、精

神的な気高ささえ感じさせる。

以下、各歌曲に見られる音楽的特徴について考察する。

楽譜は、G.Henle Verlag, 1990を参照されたい。なお、対訳は筆者による。

第1曲

Auf dem Hügel sitz ich spähend

丘の上に座り

Auf dem Hügel sitz ich spähend
In das blaue Nebelland,
Nach den fernen Triften sehend,
Wo ich dich, Geliebte, fand.

丘の上に座り
霧がかった青い土地を眺める
はるか先に見える草原
そこは愛するあなたに出会った場所

Weit bin ich von dir geschieden,
Trennend liegen Berg und Tal
Zwischen uns und unserm Frieden,
Unserm Glück und uns'rer Qual.

あなたから遠く離れ
山や谷が私たちの間を隔てる
私たちの平安、私たちの幸せ
私たちの苦悩までも

Ach, den Blick kannst du nicht sehen,
Der zu dir so glühend eilt,
Und die Seufzer, sie verwehen
In dem Raume der uns teilt.

ああ、こんなに恋いこがれて見つめても
この眼差しはあなたには見えない
そしてため息も、私たちを隔てている
空間では消えてしまう

Will denn nichts mehr zu dir dringen,
Nichts der Liebe Bote sein?
Singen will ich, Lieder singen,
Die dir klagen meine Pein!

あなたに届くものはないのだろうか
愛の使いはないものだろうか？
私は歌おう、あなたへの嘆き
私の心の痛みを歌にして

Denn vor Liedesklang entweicht
Jeder Raum und jede Zeit,
Und ein liebend Herz erreicht,
Was ein liebend Herz geweiht!

歌の調べは
私たちを隔てる時空を消し去る
そして愛する心は届く
愛する心が崇めたものに！

3/4拍子。Es-dur。Ziemlich langsam und mit Ausdruck(きわめて遅く、表情をもって)。全5節。
ピアノはEs-durの主和音からはじまる。第1節は、丘の上に座り、もの思いにふける様が描写されている。冒頭は、ピアノの動きが少なく、歌唱旋律にテンポ感の自由が与えられている。

全5節は同じ旋律であるが、第3、4節は、詩の言葉に応じた変化がいくつか見られる。第3節における「glühend 恋いこがれる」の語は、シンコペーションにより強調されて情熱的な恋心が表現される。「Seufzer ため息」の直後は8分休符によって旋律が途切れることにより、言葉のニュアンスがより直接的に描写されている。また第4節では「Bote 使い」の部分で、前述の「glühend」と同一の旋律は緩やかなリズムに変更され、「Lieder 歌」は3連符の旋律により一層メロディックになる。このように詩句の意味に応じた効果的な変形がなされている。

ピアノパートを大まかに見ると、節を追うごとにリズムの単位が、4分音符→8分音符→16音符と細かくなっている。また、最後にはnach und nach geschwinder(だんだん速く)の指示も見られる。このように徐々にスピード感を増していく様は、第1節「遠く離れた恋人の住む土地を眺

める」、第2節「山や谷がすべてを隔てている現実」、第3節「燃えるような思いも伝えられず、ため息も届かない切なさ」、第4節「あなたへの歌で思いを伝えたい」、第5節「歌ならずすべてを乗り越え、あなたの心に届くだろう」という「静」から「動」への移り変わりに対応している。

快活なピアノによる後奏では、Es-durの完全な主和音にとどまることがないまま、G-durの主和音が示される。この突然の和音の変化は次曲へ続くこと、あるいは既に第2曲に切り替わったことを暗示するかのよう響く。

第2曲

Wo die Berge so blau

青々とした山が

Wo die Berge so blau
Aus dem nebligen Grau
Schauen herein,
Wo die Sonne verglüht,
Wo die Wolke umzieht,
Möchte ich sein!

青々とした山が
灰色の霧からそびえ立ち
見下ろしているところ
太陽は燃えさかり
雲がたなびくところに
私はいたいのだ!

Dort im ruhigen Tal
Schweigen Schmerzen und Qual,
Wo im Gestein
Still die Primel dort sinnt,
Weht so leise der Wind,
Möchte ich sein!

その静かな谷では
苦しみ、悩みも沈黙する
桜草が岩間で
ひっそりと咲き
風がかすかに吹いているところに
私はいたいのだ!

Hin zum sinnigen Wald
Drängt mich Liebesgewalt,
Innere Pein,
Ach, mich zög's nicht von hier,
könnt' ich Traute, bei dir,
Ewiglich sein!

あの思慮深い森へと
愛が、そして内なる痛みが
私を駆り立てる
ああ、ここから誰も私を連れ出しては
くれない。愛する人よ、あなたの
そばに永遠にいられたなら!

6/8拍子。G-dur。Ein wenig geschwinder（やや速く）。全3節。

短い前奏の中で、ピアノによって第2曲の旋律が提示される。歌唱旋律のみに注目すると、a-b-aの形式と捉えることもできる。しかしbの箇所では、転調しながらも、ピアノパートにおいてaの箇所と同一の旋律が奏されている。そのため、この作品も変化有節歌曲とみなしたい。

第1、3節の歌の旋律は非常にシンプルで、G-A-H-A-G、A-H-C-H-A、H-C-D-C-Hの音階のみできている。第1節で、ピアノは歌唱旋律と同一の音型をたどる。「Berge山々」、「nebligen霧がかかった」、「Sonne太陽」、「Wolke雲」という自然を描写する単語には、歌もピアノも比較的長い音が与えられて強調されている。ピアノパートには、これらの箇所にクレッシェンドの指示が記されている。ピアノという楽器の特性からそのような演奏は不可能であるが、この指示は、歌い手に音楽の方向性を示す。

「möchte ich sein わたしはいたい」という詩人の感情を吐露する言葉は、原詩にはない繰り返しが見られる。

第2節では、C-durへ転調する。第1節の歌唱旋律をピアノが奏で、歌はピアノと同じリズムでG音を一貫して保持することにより、「schweigen 沈黙する」、「still ひっそりと」という詩句が表現される。最後の「möchte ich sein」はここでも繰り返され、第1節との統一がはかられている。

第3節が始まる前の間奏で再びG-durに戻る。ここでは nach geschwinder (だんだん速く)、歌が始まると Ziemlich geschwind (きわめて速く)の指示があり、音楽はせきこんだようになる。歌唱旋律は第1節と同一でありながら、ピアノは高揚する青年の心情とともにエネルギーを増して変化していく。「innere Pein 内なる痛み」の語にも原詩にはない繰り返しが見られ、2回目は poco adagio (少しゆっくり)でg-mollに一瞬転調し、青年の苦悩が垣間見える。

第3曲

Leichte Segler in den Höhen

天空の軽やかな帆船よ

Leichte Segler in den Höhen,
Und du Bächlein klein und schmal,
Könnst mein Liebchen ihr erspähen,
Grüßt sie mir viel tausendmal.

天空の軽やかな帆船よ
狭くて小さな川よ
私の恋人を見つけ出す事ができたなら
たくさんの挨拶をおくってくれないか

Seht ihr Wolken sie dann gehen
Sinnend in dem stillen Tal,
laßt mein Bild vor ihr entstehen
In dem luft'gen Himmelssaal.

雲よ、彼女がああ静かな谷で
物思いにふけていたなら
天の高みに
私の姿を生じさせてくれ

Wird sie an den Büschen stehen,
Die nun herbstlich falb und kahl,
Klagt ihr, wie mir ist geschehen,
Klagt ihr, Vöglein, meine Qual!

彼女が秋の朽ち果てた茂みの傍らに
ただずんでいたなら
嘆き訴えてくれ、私がどうしているのかを
小鳥たちよ、嘆き訴えてくれ、私の苦悩を!

Stille Weste, bringt im Wehen
Hin zu meiner Herzenswahl
Meine Seufzer, die vergehen
Wie der Sonne letzter Strahl.

静かなる西風よ
私の想いを運んでくれ
太陽の最後の光が消えて行くような
ため息を

Flüstr' ihr zu mein Liebesflehen,
Laß sie, Bächlein klein und schmal,
Treu in deinen Wogen sehen
Meine Tränen ohne Zahl.

狭くて小さな川よ
私の愛の訴えをささやいてくれ
おまえの波の中に
私の数えきれない涙を見せてくれ

4/4 拍子。As-dur → as-moll。Allegro assai (非常に速く)。全5節。

第2曲の6/8拍子からの拍子の変化と調性の変化により、前曲と大きく印象が変わる。第1節「帆船よ、小川よ、挨拶をおくってくれ」、第2節「雲よ、空に私の姿を描いてくれ」、第3節「鳥たちよ、この嘆きを伝えてくれ」、第4節「風よ、ため息を伝えてくれ」、第5節「小川よ、私の涙を見せてくれ」という願望に対応して、歌の旋律やピアノの音型に細かな変化が加えられている。

第1節のピアノの3連符の繰り返しのリズムと、歌の8分休符に寸断された規則的なリズムは、鼓動の高まりを表しているかのようで、上昇しては下降する旋律と相まって切迫感を与える。続

く第2節の「laßt mein Bild vor ihr entstehen 私の姿を（天の高みに）生じさせてくれ」は、まるで空に描いているかのような音のつながりで表される。ピアノの軽快な3連符は付点8分音符と16分音符に変わり、若干柔らかい印象となる。

第3節から第5節は、嘆きや切実な願望を表すように短調（as-moll）になる。第1、2節が転調した旋律が繰り返されるが、ここでもピアノパートでリズムの変化が見られる。第3節は4分音符が中心であったが、第4節では歌の旋律を半拍遅れで追いかける8分音符、そして第5節では両手が3連符となる。それに加えて、「meine Qual 私の苦悩」、「wie die Sonne der letzter Strahl 太陽の最後の光のような（私のため息）」、「meine Tränen 私の涙」の悲しみを表す言葉は、ritardando（だんだんゆっくり）の指示が与えられ、快活なリズムは収まり、一層憂いを帯びた調子になる。最後に繰り返された「ohne Zahl 数えきれない（私の涙）」がEsの音で引き伸ばされ、そのまますぐに第4曲へと引き継がれる。またこの時6/8拍子になる。

第4曲

Diese Wolken in den Höhen

天空の雲も

Diese Wolken in den Höhen,
Dieser Vöglein munt'rer Zug
Werden dich, o Huldin, sehen.
Nehmt mich mit im leichten Flug!

天空の雲も
元気に飛び回る小鳥たちも
親愛なるあなたを見るだろう
その軽やかな飛行で私を運んでくれ!

Diese Weste werden spielen
Scherzend dir um Wang' und Brust,
In den seidnen Locken wühlen.
Teilt' ich mit euch diese Lust!

この西風は
あなたの頬や胸元で戯れ
絹のような巻き毛を吹き抜けるだろう
おまえたちの楽しさを分けてくれ!

Hin zu dir von jenen Hügeln
Emsig dieses Bächlein eilt.
Wird ihr Bild sich in dir spiegeln,
Fließ zurück dann unverweilt!

小川が向こうの丘からあなたへと
せわしなく流れてゆく
彼女の姿を映し出したなら
とどまらずに戻って来てくれ!

6/8拍子。As-dur。Nicht zu geschwinde, angenehm und mit viel Empfindung（速すぎず、心地よいテンポで、感情豊かに）。全3節。

歌唱旋律は、第3節最終行の繰り返し以外は同一で、軽快なリズムと跳躍が特徴的である。ピアノパートを見てみると、第1節は、右手が鳥のさえずりを表すような装飾音の付いた音型、第2節は、左手の3連符に歌の旋律が散りばめられた音型、そして第3節は、自由な流れの音型となっており、節ごとの情景描写の変化に富んでいる。

また、「Nehmt 運んで」、「Teilt 分けて」、「Fließ 流れて」の命令形の言葉は、比較的高いEs音とシンコーペーションのリズムによって効果的に際立たせられている。第3節では「Fließ zurück dann unverweilt とどまらず戻ってきてくれ」の語が繰り返され、さらに「unverweilt とどまらず」がもう一度繰り返される。ここで、nach und nach geschwinderの指示とともに、青年の強い願望が豊掛けられる。勢いを増したピアノの後奏は、自然に5曲目の前奏へと引き継がれていく。

第5曲

Es kehret der Meien

5月は戻り

Es kehret der Maien, es blühet die Au,
Die Lüfte, sie wehen so milde, so lau,
Geschwätzig die Bäche nun rinnen.
Die Schwalbe, die kehret zum wirtlichen Dach,
Sie baut sich so emsig ihr bräutlich Gemach.
Die Liebe soll wohnen da drinnen.

5月は戻り、野に花が咲く
風は優しく、あたたかく吹き
おしゃべりな小川は流れる
燕は心地よい屋根に戻り
せっせと巣作りをする
そこに愛が宿るのだ

Sie bringt sich geschäftig von Kreuz und von Quer,
Manch' weicherer Stück zu dem Brautbett hieher,
Manch' wärmendes Stück für die Kleinen.
Nun wohnen die Gatten beisammen so treu,
Was Winter geschieden verband nun der Mai,
Was liebet, das weiß er zu einen.

燕たちはあちこち飛び交い
新婚のベッドに柔らかいものを
子どもたちに暖かいものを運ぶ
今や、燕たちは信じ合って共に住む
冬が離していたものを5月が1つにする
5月は愛が1つになることを知っている

Es kehret der Maien, es blühet die Au',
Die Lüfte, sie wehen so milde, so lau,
Nur ich kann nicht ziehen von hinnen.
Wenn Alles, was liebet, der Frühling vereint,
Nur unserer Liebe kein Frühling erscheint,
Und Tränen sind all ihr Gewinnen.

5月は戻り、野に花が咲く
風は優しく、あたたかく吹き
私だけがここから動くことができない
春は愛し合うすべてのものを結びつけ
るのに、私たちの愛に春はこない
そして涙だけがすべての収穫

4/4 拍子。C-dur。Vivace (速く)。全3節。

4曲目の雰囲気のまま、G音のトリルによる全音符のフェルマータを2度繰り返した後、5曲目で登場する燕のさえずりや、勢いよく飛行する様子がピアノで描写される。vivaceという速度の指示に加え、言葉の数の多さ、音符の細かさなどにより、6曲中で最もスピード感がある。よって、リズムの規則性を壊さず、正確な音程と発音で歌うためには高度な歌唱技術が要求される。

この歌唱旋律は、詩の韻律が生かされている。第1、2節において、歌唱旋律、ピアノパートはまったく同一である。執拗に繰り返される音型と、テンポの速さが相まって、生き生きとした雰囲気が作られる。ここでは、春が訪れた喜びが一貫して表現されている。

一方、第3節では「ich kann nicht ziehen von hinnen ここを動くことができない」、「kein Frühling erscheint 春は現れない」と悲しみの心情が歌われる。この第3節において、ピアノの4分音符C音と8分音符G音によるバスの音型の書法に違いが見られる。第1、2節では、2つの8分音符はそれぞれ独立して書かれていたが、第3節ではまとめた形で書かれている。実際演奏されるリズム自体の変化はないが、2つの8分音符がはずんで演奏されるのを抑えようとした作曲家の意図があると思われる。ここではさらに、ritardandoの指示によって詩人の憂いがより濃く表現され、ピアノパートの和音の構成音とリズムは重厚になり、軽快な流れが止められる。「(涙のみが) all ihr Gewinnen すべての収穫」の旋律が繰り返された際には、c-mollの響きによって、あきらめや落胆が表される。

第6曲

Nimm sie hin denn, diese Lieder

この歌をどうか受け入れて

Nimm sie hin denn, diese Lieder,
Die ich dir, Geliebte, sang.
Singe sie dann Abends wieder
Zu der Laute süßem Klang!

この歌をどうか受け入れて
愛するあなたに歌ったこの歌を
そしてあなたも夕べに、リュートの
甘い調べに合わせて歌っておくれ!

Wenn das Dämm'rungröte dann ziehet
Nach dem stillen blauen See,
Und sein letzter Strahl verglüheth
Hinter jener Bergeshöh'!

赤い夕日が、静かな青い湖に
引き入れられる時
そしてその最後の光が、あの山の高み
にだんだん消えゆく時

Und du singst, was ich gesungen,
Was mir aus der vollen Brust
Ohne Kunstgepräg' erklingen,
Nur der Sehnsucht sich bewußt;

あなたは歌う、わたしが歌った
胸いっぱいのおいを
芸術的な煌めきはないけれど
ただ憧れだけが込められている

Dann vor diesen Liedern weichet,
Was geschieden uns so weit,
Und ein liebend Herz erreichet,
Was ein liebend Herz geweiht.

これらの歌は
私達を隔てているものを消し去る
そして愛する心は届く
愛する心が崇めたものに!

2/4 拍子。Es-dur。Andante con moto e cantabile(歩くような速さで動きをもって、歌うように)。
全4節。

この曲への移行と同時に長調に転調し、ピアノが比較的長めの美しい前奏を奏すると、悲嘆に暮れることを少し思い留まるような穏やかな雰囲気を作りだす。この甘美な旋律を、第1節の歌が引き継ぐ。a-b-a'-cの形式で節ごとに旋律が変わり、全6曲中この曲のみが変則的な形式である。

第1節と第3節で同じ旋律が用いられているのは、それぞれ「あなたのために作ったこの歌を歌ってほしい」、「私の想いをこめたこの歌をあなたは歌う」という共通の内容を反映しているものと思われる。

第2節では、「Berges höh' 山の高み」の高さを歌のEs、Fの高音で、「letzter Strahl 最後の光」をピアノの6連符の和音で表し、さらにこの夕日の沈む様子を下降音型によって表すなど音楽による自然描写が見られる。

第4節では、4分の3拍子になり、第1曲と同一の旋律が回帰する。「und ein liebend Herz erreichet, was ein liebend Herz geweiht! そして愛する心は届く、愛する心が崇めたものに!」という詩句も、第1曲の最終2行と全く同じである。この回帰によって、青年の一途な想いが感じられる。その後、allegro molto e con brio(とても速く、輝かしく)の指示を伴い、第4節の歌詞が繰り返されて発展していく。曲の終わりに向けて、音域の高まり(Es → F → G)、音の強さ、テクスチャの厚みを増すことにより、音楽の頂点を築く。

以上、各曲の音楽的特徴を述べた。全曲を通しての特徴として、まずは第6曲を除いて変化有節歌曲であることが挙げられる。また、ひとつの素材を変化させながら繰り返す手法が多く見られた。これらは、各曲の後半に向けて音楽的發展を成し、青年の気持ちの高まりを効果的に表現している。

また、歌唱旋律は比較的音域が狭く、大きな跳躍も少ないが、このことで素朴な印象が醸し出され、美しい自然風景や、恋人を想う純真な青年像が浮かび上がる。さらに全体を通して、テンポ変化の指示が多く見られた。

各曲間では、拍子の変化と転調によって、場面転換が図られていた。そのため、それぞれの曲の独立性を感じつつも、ピアノパートによる巧妙な曲間の接続によって、大きな1つの歌曲作品として捉えることができるであろう。

3. 演奏解釈

上記で述べた音楽的特徴を踏まえ、各曲の演奏のポイントについて述べたい。

第1曲は、丘の上に座って、今いる場所と恋人との距離を思うところから開始される。第1節では、朗唱的な演奏で、聴き手に対して自分の状況を語るようにすると効果的であろう。冒頭のピアノは動きが少ないため、歌い手が主導権をもって演奏することが可能である。よって音楽の運びを一定に保つのではなく、歌詞のイントネーションに応じたアゴーギクを用いて歌いはじめると良いだろう。第4、5節で歌われる「自分の想いを歌にしよう、これから歌われる歌の調べこそ愛を恋人の心に届けるのだ」という内容は、第2曲目以降の音楽の方向を示す。よって第1曲は、この連作歌曲集のプロローグ的な役割と捉えて歌う。

第2曲は、恋人がいる土地に対する憧れが歌われる。彼女のいるところに「私はいたい」という歌詞が繰り返され、気持ち徐徐に増幅されていく様が表現される。転調する第2節は、主旋律はピアノの上声部に委ねられる。よって、G音が持続する歌唱旋律は、言葉を語る事に集中すると良いだろう。第2節まで強弱記号は *pp* が多いが、第3節では *f* になり、テンポも大きな揺れが見られる。その指示を生かして、感情の振幅を意識的に表現することが必要である。

第3曲は、青年の鼓動の高まりを表すかのような軽快なリズムが登場する。第1、2節は「恋人に想いを伝えたい」と心弾むが、第3節以降で短調になると、詩人の苦悩が表されていた。歌詞の内容に応じて、前半の第1、2節はせきこむように運んでも良いだろう。第3~5節は、ピアノの音の変化だけを見るとエネルギーは増大するかのようと思われる。しかし、歌詞の内容と、楽譜に記載された *pp* の指示により、エネルギーを抑制して歌うことで、恋人と離れている現実に嘆く姿を表現できるだろう。そのことによって、前半の詩の内容とのコントラストを作りたい。

第4曲は、自然に対して自身の想いを託すという第3曲と共通の内容であるためか、曲間のピアノによる間奏が無い。4分の4拍子から8分の6拍子に変わった際、テンポ感を見失わずに自然な移行を心がけると良いだろう。せわしなくならず、むしろ優雅に跳躍やリズムを味わって演奏することで、青年の穏やかな願いを表現したい。その一方で、各節の最終行の命令形の言葉はシンクペーションを生かし、一時的に流れを止めても、思いの強さを際立たせるべきである。

第5曲は、5月が再びめぐってきた喜び、燕の仲睦まじい姿と、恋人のいる土地に戻るができない自分の悲しみとが対比される。春の情景描写の美しさを重視し、歌唱旋律の高音やリズムの反復を、あえて強調することなく流れるように歌うと良いだろう。第3節の最後、自身の境遇を嘆く箇所には Tempo I を挟んだ2回の *ritardando* があり、最後には *adagio* となる。それらのテンポの変化は、詩の内容に対応していることは明らかであり、大げさに歌うことが許されると思う。「ja, all ihr Gewinnen そう(涙だけが)すべての収穫」は力尽きたような弱々しい表現も効果的であろう。

第6曲は、ピアノの間奏を受けて、嘆きから希望への変化を感じる。これまで歌い続けてきた第2曲から第5曲までの、自身の気持ちのすべてを恋人に届けたいという思いをもって歌いはじめたい。第4節において、第1曲と同一の旋律が回帰した際は「離れた恋人にこの歌は届くだろう」という確信を *risoluto* (決然と) で歌いたい。その後、さらに第4節の歌詞を繰り返しながら発展していくが、この部分は作品全体のコーダのように感じられる。ここでは新たにエネルギーを積み重

ねることで、音楽的頂点をしっかり形成し、若者のひたむきな真実の愛を表現したい。

結論

筆者はこれまで、リート演奏において、ドイツ語の理解とそのニュアンスの表現に重きを置いてきた。それに伴って詩の世界観に浸り、それぞれの作曲家の音楽を感情的に歌うことを第一としてきた。それは《An die ferne Geliebte》の演奏においても生かされるであろう。

しかしこの作品は、曲の形式を理解して歌うことも必要だと思われる。今回の考察を通して、ひとつの素材が多様に変化、発展していることが分かった。ロマン・ロランがこの歌曲を「変奏されたエピソードをもつ単一のリート」と呼んでいるように、各曲のはじめに提示された素材は、節を追うごとに変化が加えられていた。これは、歌詞の内容と見事に結びついているのである。そのため、歌詞に応じた細やかな変化を捉え、それらを十分に表現していくことで、はじめてこの作品の持つ魅力が存分に発揮されるのである。

参考文献

- 『作曲家 人と作品シリーズ ベートーヴェン』平野昭
音楽之友社 2012
- 『ニューグローヴ世界音楽大事典 第16巻』「ベートーヴェン」平野昭
講談社 1993
- 『ベートーヴェン』ジャン・ヴィトルト
店村新次訳 音楽之友社 1961
- 『ベートーヴェン』メイナード・ソロモン
徳丸吉彦・勝村仁子訳 岩波書店 1993
- 『ベートーヴェン 作品篇』属啓成
音楽之友社 1963
- 『ベートーヴェン書簡選集』下
小松雄一郎訳 音楽之友社 1979
- 『ベートーヴェン大事典』バリー・クーバー
平野昭・西原稔・横原千史 平凡社 1997
- 『ベートーヴェンの言葉』津守健二
朝日新聞社 1971
- 『ベートーヴェンの生涯』青木やよひ
平凡社 2009